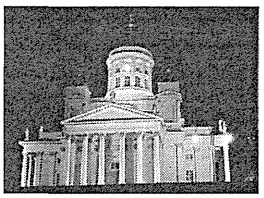
海外研修報告



フィンランド「ＰＩＳＡ型学力の育成」

Ⅰ　調査課題

・PISA 型読解力，数学的，科学的リテラシーの育成について，フィンランドの進んだ実践を見聞，体験し，日本の教育法と比較し，相違点がどのような教育システムや教育方法によって現れるのか調査する。また、北欧フィンランドの学力のとらえ方，評価方法，PISA 型学力等がどのようなニーズによって育成されているのか社会の状況等も学ぶ。

Ⅱ　調査結果

・フィンランドでは「国の復興のため国民が協力して働く」という歴史的背景から，国を支える人材を育て，自立させるよう，すべての国民に充実した教育を行う。国家教育委員会で「ナショナルコアカリキュラム」を策定するが，基本的な指針や基準を示しているだけで，実質的な運営は自治体や各学校に任されている。その教育システムは国民個々がニーズに応じて，必要な教育を受けることができる。9 年間の基礎教育では自分なりの職業観や将来へのビジョンが持てるよう「自立」を目指した教育が行われ，進路は個々が選択できる。最終的には何らかの資格をとり，就労することを目的とする。教育に対する考え方は性別･地域･家庭の経済状況等に関係なく平等に教育の機会を提供するのが原則であり，基本的に教育は無償で，個への対応は充実している。

・資格を得るために長期の養成期間を経た，十分に研修を積んだ教師が教育を担っている。研修も様々な施設，機関で行う事ができ，力量を高めるための環境は整えられている。外部機関と幅広く連携がなされている。

Ⅲ　考察として

・教科の内容は基本的なものから非常に高度なものまで扱われているが，何度となく繰り返し学習される。児童･生徒の発達段階に応じて理解度が深まっていく。また，身近な具体的な題材から，抽象的な概念の学習に続いていく。授業では個々のレベルに応じて，興味・関心を高めながら学習していき，その中で学ぶ目的や学び方を身につけ，自己分析し自己評価する事が求められる。職業や人生を決めていくのは自己責任とされる。

・主に教育に携わる教師に加えて，様々なサポート体制が整えられている。障害があるもの，移民などの他言語が母語の子ども，ひきこもりなど支援の必要な児童・生徒にはアシスタントティーチャー，カウンセラー，心理学者，ソーシャルワーカーなどの専門家がつき，図書館や公民館も教育の場として提供される。

・教師は児童･生徒を知り，目標と指導方法を提示する。保護者も責任を持って子ども達を監督する。そのための支援を国や自治体が行っていく。教育は「信頼:trust」と「協同:cooperation」で成り立っており，国と自治体，教師と児童・生徒，学校と地域・家庭など様々な関係性の中で，相互に尊重しながら教育を行っている。超大国ではなくても，教育を中心に国・自治体のために力を発揮することができる人材を育てるために整えられたシステムがここにあると感じた。

（山梨南中学校　窪田勇治）